

序文

世界は虚ろで、僕たちはちっぽけで、揺らぎながら震え、足を挫かれ、脅える風のざわめきを聴きながら、ただひたすらに、楽園を祈ってる。

楽園二ーナン

三月つりり 2019/2/13 14:59～2019/2/25 07:45, 3/2 8:00-8:56

第一章 さいわい

第一話 世界と二ーナン

僕らの世界は簡単だ。大人びた子供たちの世界。僕らは精一杯に背筋を伸ばし、胸を張って、かつての大人たちの世界を彼ら以上の良さでもって踏襲してる。それが僕たちにできる、彼らへの、せめてもの報いだ。

僕は二ーナン、14歳。男に生まれた。小さな頃の僕は、まだ変わってしまいう前の世界で、大人たちに翻弄されて生きていたように思う。彼らの都合で僕の運命は毎日、流転していた。父親と呼べる人が帰ってこない日が続き、周囲の大人たちは一人残らず異常で異様な淀んだ澱を僕に浴びせ続けた。父方の祖母は幼児だった僕の些細な振る舞いを作法がなっていないと嫌悪し熱湯を僕に浴びせかけ、父方の祖父は戦いで世を去ったその弟に向けて僕の呟いた「平和に殉じる人であって欲しかった」という僅かな言葉を呪い片手で首を締め縊りながらもう片方の手で顔の骨が折れるまで殴り続けた。母親は父親への呪詛を僕に呟き、僕にも呪うように言い続けたし、母方の祖母は僕を見ると侮蔑しながら「あの男にそっくりだ、生まれついて父親と同じ心無い鬼だ、鬼の子だ」と烙印を押しながら、父親の代わりに育てる資金を出してやっているとへの恩に報いると僕に迫り、どんな嫌なことでも従わせ、膝が脱臼するまで正座させられる日々は、足の骨が変形し普通に歩けなくなるだけの年月続き、人形のように動くことを命じて、自らの好む舞踊を自らの好む仕草と作法で幼い僕に異性装で踊らせ続け、権力に取り入るため老人達に僕をあてがった。それと同時に母方の祖父は、僕に戦前の皇国史観の型にはまった男らしさを求め、嫌がる僕の髪を常に短く切り揃え、人を殴りつけ傷つけるための技術の習得を無理強いし、僕が自分自身の望みを持つことや自分自身の望みを叶えることを常に諦めさせ続け、自分本位の希望を持つことは身勝手だと、身勝手な人間は不出来で劣った存在だと、被差別種だと、言い含め続けた。誰一人として味方のいない状況での、老成した諦め、それが14歳で初めて自殺未遂をした僕の、幼い頃からの自意識の基本的な在り様だった。

永遠に続くと思われた無限地獄は、しかし、突然、終わりを告げた。みんな、みんな死んだ。突然、大人たちは残らず死に絶え、子どもたちの世界がやってきた。何故だかは判らない。しかし僕が生きていてもいい世界が、この世に訪れたんだ。奇跡だった。僕は世界の滅亡に感謝してる。大人たちの世界の滅亡は、子どもたちに生きていられる世界を提供してくれた。生きる価値のある存在なんて、いると思っていなかったけれど、もしかしたら子どもたちの中には、僕に無理強いしたりしない、まともな人間が、いるかもしれない。そう思ったら、僕は喜びに満ち溢れた気持ちになって、笑ったり、泣いたり、駆け回ったり、転げ回ったり、疲れ果てたりして、生きていて良かったっ

て、初めて思えたんだ。

今、僕は、大人の絶えた子供の世界で、彼らの遺した遺産を使って、安寧に、緩やかに、出来る限りの幸福を得ながら、暮らすことを試みてる。大人の遺した文化や文明は、僕ら子供にだって適応できた。でもだからって、世界が良くなっていく訳じゃないし、僕ら子供が子供でなくなれる時が訪れるなんて、もはや期待できる世界じゃなくなつた。僕らはもう、どうしようもなく現実を受け入れて、悟つてる。残された、どれだけ残されてるのか解らない日々を、それでも僕らは、生きていく。

僕ら、そう、僕の、今の、家族の話をしよう。僕の家族は二人と一匹。親友である恋人が二人と、雄の黒猫。二人の恋人は、一人は男の子、もう一人は女の子。男の子はミーミ、3歳。ミーミはかわいいよ。女の子みたいにいつも鳴くん。女の子はユーヨ、4歳。ユーヨはとってもおとなしい。二人共、僕を信じ、僕と暮らし、僕が生きている意味をくれる。黒猫のミカツキは、うちに迷い込んだ子で、知らない人にはとっても臆病だけど、僕たちのことは大好きで、いつもみんなを舐め合ってる。僕たちは恋人で、家族で、きつと愛がある。

第二話 ミーミ

「ねえ、ニーナン、僕の下着を食べないで」

ちよつと啜えて遊んでいると、ミーミは、はにかんで俯いた。でもまた目線をこっちに寄越すと、顔を赤らめながらも、

「ねえっしたら、返して」

と言つので返してあげる。ミーミはシャツを羽織っているだけだから、寒いのかもしれない。僕は手を伸ばすと、ミーミの足から腰にかけてを撫で上げる。

「あっ♡」

鳴いた。かわいい。目を瞑って切ない顔をするミーミは世界一かわいい。ベッドの上で僕は語りかける。

「ミーミ、僕たちが出会って、もうすぐ一年になるね、今でも思い出すよ、あの日のミーミ」

「う、んっ、僕も、あの日、出会って、あんっ、そう、いつの間にか、ニーナンが僕の側に立ってたんだ。それで、抱きしめてくれて」

「うん、泣いてたから」

「僕は、お母さんがいなくなつて、悲しくて、寂しくて。でもあの時、ニーナンが僕の新しいお母さんになってくれるって、分かったんだ」

「僕はお母さんかどうかわからないけど、ミーミは僕に、生きてていいって気持ちくれるよ。舐めてくれるし」

「う、んっ♡ ペロペロ大好き」

「うん、僕もだよミーミ」

「大好き、ニーナン」

僕たちは抱き合つて、舐めあつて、盛大な花火をあげた。ミカツキは籠の中でぺたんぺたんと尻尾を打ち付けてる。僕たちを祝福してくれてるみたい。

「すーすー」

ミーミは眠ってしまった。無理もない、お母さんのことを思い出したら、いつも泣いて眠ってしまうもんな。

第三話 ユーヨ

と、扉の影からユーヨが目を見せる。上気して息をあげ、僕をジッと見つめる。

「僕、見てたよ。素敵だった。二人の愛」
僕は見つめ返す。

「うん、僕も奇跡だと思う」

「僕もね、ニーナンと奇跡したいな」

「もちろんだよ、嬉しいよユーヨ」

ハグからのキス。キスからの見つめ合い。ユーヨは両手を僕の首に回して、両足で僕の腰にしがみつくコアラのポーズだ。

「僕もニーナンと出会った日のこと思い出すよ」

「あれは、僕とミーミが出会って少しした頃だったな」

「僕、使えてた大人たちが急にいなくなっただけで、どうしたらいいか分からなくなっただけで、ずっと何かをしてあげることでも生かして貰えてたのに、仕える相手がいなくなっただけで、どうして生きていけるの、って。そう思って、仕える人を探して、ウロウロ、ウロウロ、彷徨ってた。そんなとき、僕は見つけたんだ。二人が両手を手のひらで繋いで、懸命に舐め合ってた」

「うん、求めあった」

「胸を打たれたんだ、もう誰もいなくなった世界に、こんなにも強い絆を持った二人がいるなんて」

「うん」

「それで見てるだけじゃ我慢できなくて、僕もその間に入れて貰った」

「そうだったね、嬉しかった」

「三人で舐めあった、あの時、思ったの、誰にも何もしてあげられなくなった僕が、何でもしてあげられる相手が、まだこの世界にいたんだ、って。一生、全部を捧げるご主人様達だった」

「うん、仕えなくてもいいけど、仕えたいなら仕えてくれるの嬉しいよ」

「僕のこと、使ってくれる？」

「うん、なんでもお願いしているよ」

「一生、ずっと？」

「一生、全部、ずっと」

「嬉しい」

チューしてギュッとしてハツとした。

「なんでもしてあげたいの」

「してくれてるね」

「僕ね、子供が欲しいな。子供を産んであげたい、ニーナンとミーミの子供」

「いいね、ユーヨが産んでくれるなら、何人でも作るよ、ミーミもきつと嬉しいよ」

「うん、ニーナンも、ミーミも、大好きなんだ、みんなで子供を作って、何人も育てて、幸せになるよ」

「うん、それも幸せだし、今もとっくに幸せだよ」

「幸せな今が、もっと幸せになるの」

「うんうん、なるうね」

「うん、なるよ」

僕たちはソファに腰を下ろし、いつまでも撫であって、いつまでも舐めあって、幸せになりあった。

ミカヅキはゴロゴロ喉を鳴らして、僕たちの顔を舐めていた。

夜が明けると昼が待っていた。朝なんか、寝ちゃったな。僕らは三人でゆっくり昼寝した。夜の間、僕らは忙しいから、昼間、ゆっくり、くつろぐんだ。

僕が「ミーミ、毛布が食べたいよ」と口に啜えると、ミーミは「だめだよニナン、食べられません」

「プリンでもいいよ、ユーヨも食べたくない?」、ユーヨは「冷蔵庫にあるからとってくるね」

「あ、待って、やっぱ、お刺身がいい、醤油とわさび、マグロ」

「待ってて」

ユーヨは、はしゃいで駆け出す。ミカヅキが刺し身を啜えてやってくる。

「待ってー」

僕が食べたかったお刺身は、ミカヅキのごちそうになった。

「大丈夫だよ、僕は『霞』でも食べて暮らしていくよ」

世界が破滅してから、子供たちは食料のインフラとして、空気のような食べ物「霞」を開発した。気体の中に栄養が入ってて、吸っただけで栄養が採れる最高の発明。水道みたいにして世界中に行き届いている子供時代の最高の新発明。

「うーん、でも味気ないよ」ユーヨが言うと、ミーミ「味付け霞も美味しいよ、フレーバーをセットすると色んな味になるもの」

「そうなんだけどね、でも、お刺身を食べさせてあげたかった」

「うん、お刺身が食べたかった」

「あっニナン泣いてる」

ミーミから頭を撫でられながら、僕はマグロ味をつけた霞を食べた。

第五話 幸いの星

夕方、星を見上げるために二階の窓から外を見ていた。

「ニナン、まだ星は出てないよ」

「ユーヨ、こっちきて」

膝枕してもらって外を見上げる。手をもぞもぞ伸ばす。

「あっ♡ 足の裏、くすぐりたいよ♡」

ちよっとしたお遊びを繰り返されると、ミーミがやってきて、

「あーん、ずるっ子、うらやましっ子、僕も僕も」

「ふふっ」

ミーミの脇をペロペロすると嬉しそうに鳴く。

「あっ♡」

僕たちは舐め合うのに忙しい。やがてみんな疲れて眠ってしまった。

ほんの少し、目が開いた時に見えたのは、ミカヅキが星に向かって手を伸ばしているところ。

「ミカ、ミカヅキ、取りたいの、星を」

「ナオオ」

「じゃあそうだな」

僕はニャンコクッキーを作ることにした。キャットフードを星型にして、ミカヅキにあげるんだ。

「さあ出来た、お食べ」

「ナオ?」

ミカヅキは普通のご飯と変わらない食欲で食べた。

「ミカヅキも霞を食べて生きていけるけど、実食するのも悪くないもんね」

うっとりとする目つきで眺めながら、僕は優しくミカヅキを撫でていた。器いっぱい
の星は、ミカヅキのお腹の中に消えていった。

第六話 幸いのうたた寝

僕がウトウトうたた寝している時、聞こえてくる声があった。ミーミとユーヨだ。

「ユーヨ、好き、ポンポン撫でて」

「ミーミかわいいよ、はいポンポン」

微笑ましい、二人とも大好きだ。ユーヨは子供が欲しいって言ってたけど、僕との子
供より、ミーミとの子供が先に出来るかもしれないな。いっぱい産んでくれるといい
な。世界の滅亡はその分だけ先送りされるし、僕の世代が人格的に問題があっても、早
く死ねて、次の世代に世界を渡せる。世代交代のサイクルが短いことって、悪いことだ
とは思えなくなったな。でも今、僕は、二人とできるだけ長く暮らしたい。

「ナオー」

ミカヅキが甘噛みしてきた。思ったことが分かったのかな、大丈夫、ミカヅキも一緒
だよ。お腹を撫でようと手を動かすと、

「ニーナン起きた？」

ミーミは気づくのが早いな。

「え、ニーナン起きたの、抱きしめてあげる」

ユーヨは優しいな。

「まだウトウトしているよ」

「じゃあニーナン、三人でギュッてしよ」

「そうだねユーヨ、僕たち三人で」

「あはは、苦しいよ二人共、大好き」

二人からギュッて抱きしめられて、僕は本当に今が生涯で一番の幸福だって、思え
た。

「あーミカヅキ来たの」

「ニヤーン」

三人で抱きあつてるところに来て、ごろんん腹出し。ペチペチ尻尾で床叩き。三人で
輪になって、その真中にミカヅキが寝て、僕はそれからまた、みんなでスースー眠り
でした。

第七話 幸いの魔法陣

夢の中で、僕らの体は魔法陣になっていた。吹き上がる紫の炎、降り注ぐ橙色に光る
粉。僕らは眠い目をこすりながらスヤスヤ眠るミカヅキの上に浮かんでる少女を見上げ
る。召喚された美少女、悪魔だ。

「やあやあ、我こそは悪魔。願いを言うが良い」

「えっと、こんにちは、僕はニーナン。この子がミーミで、この子がユーヨ。君はどう
してここに来たんだい」

「魔法陣で我を呼び出したであろう。願いを言うが良い」

「あつ、魔法陣の形になっちゃった？ ごめんごめん、うっかり魔法陣だよ」

「では我を呼び出したことに意味は無いとな？」

「うん。全然。でもせっかくなから来たんだから友達になろうよ」

「我と友達に？」

悪魔はポロポロと泣き出し言った。

「我は魔界でも一人っ子、はぐれっ子、泣き出しっ子の落ちこぼれ、友達なんてついぞ

居たこともない、ああ嬉しや、友達が出来るとは」

ミーミも「僕も友達だよ」、ユーヨも「僕も友達」

「みんな友達だよ。さあ、握手しよう」

「我は友達かえ、そうかえ、しかし我も悪魔、人間の子よ、我は悪い子ぞ。お前たちを食べてしまっぞよ」

「いいよ、僕たちはもう最高の幸福を味わった、遊び終わったら、いつでも食べてしまえばいい、いつでも魂を魔界に連れてってくれ」

ミーミも「僕もいいよ」、ユーヨも「僕も連れてって」

悪魔は衝撃を受けてよろめいた。

「そんな、魂をくれるとな、何の願いも叶えていないのに、あまつさえ友達になつてくれるぞして、我の世界が崩壊してしまっ」

悪魔はよろけて転んで、ミカツキの上に覆いかぶさった。

「ミニャー！」

スヤスヤ寝ていたミカツキは飛び起き、鳴くと、息を思い切り吸い込んだ。煙状になった悪魔はミカツキに吸い込まれていく。

「ああ、我はそなたたちと友達になれて嬉しかった、これからはこの猫と一体となってそなたたちを見守ろうぞ、末永く」

ひとしきり吸い込んだところで、ミカツキは「ンナオ」と落ち着きを取り戻す。と、その場にうずくまり、また寝息をたてて眠り始めた。

まだ友達になつたばかりで何もしていなかった悪魔が急にいなくなつてしまつて、僕は呆然としていた。そしてミーミとユーヨに話しかけようと左右を見ると、あれ、二人とも寝ている。そして僕も寝ている。おかしいな、夢かなこれは。

そう思っていると、目が覚めた。魔法陣は寝相の悪さで崩れ、ミカツキも枕の上で腹出しポンポコリン。やっぱり夢だったのか。脱力の中、僕はミーミとユーヨを抱きしめて、また横になった。でも、スヤスヤ眠るミカツキをみると、やっぱりそこには、あの泣き虫の悪魔が宿つてるような気がしてくるのだった。

第八話 大好き

ミカツキが僕の顔を舐めた。

「ミカツキどうしたの」

見ると、何かを訴えかける目で、僕の顔にまたがって息を塞いだ。呼吸が絶たれた僕は窒息状態となり、薄れゆく意識の中で幻想を見る。ミカツキのお腹の中で、悪魔が僕を求めている。僕はそれに応えようとミカツキを抱きしめ、中に息を吹き込む。中の悪魔はやつと呼吸し、魔法で僕を助けてくれる。

「すーすーっ、はあーっ」

頭にしがみつくミカツキを撫でる。

「もうー、ミカツキ、かわいすぎでしょ、苦しいよ」

ふと気づくと、ミーミとユーヨが体中を舐めてくれている。何の儀式だろう。

「ニーン、さっきミカツキが喋ったんだよ」とミーミ。

「えー喋ったって、人間の言葉を？」

「そうー、ありがとって言った」とユーヨ。

「ユーヨも聞いてたんだ」

「うん、何があるがとうなんだろうね」

「ぎつと悪魔が息を吹き返したんだよ」

そう言つと、ミーミとユーヨはキョトンとした。

「それって泣き虫の悪魔？」とミーミ。

「煙になってシュワシュワの？」とユーヨ。

「え、あれって夢じゃなかったの？」と僕。

「僕たちみんな同じ夢をみたのかもね」とミーミが言うと、

「僕もそう思う」とユーヨ。

体中をペロペロ舐め続けてくれながら、二人は僕の目を見る。僕は二人に微笑むと、しがみついたままのミカヅキをみて言う。

「大好きだよ」

ミーミとユーヨは、

「あー中の悪魔のこと大好きってー」

「ずるー」

「ふふ、みんな大好きだよ」

「ずるっ子ー」

「ずるー」

僕はみんなを抱きしめて、笑って、微笑んで、眠った。

夢みたいに幸せな僕たちの暮らし。いつまでも続け。いつまでも、いつまでも、夢のように続け。僕も、ミーミも、ユーヨも、ミカヅキも、悪魔も、幸せで、ただ幸せで、それだけで、いいんだ、それが、本当のさいわいなんだから。

第一章 おわり

第二章 いたわり

第一話 ともだち

僕らが幸福に暮らしてる家に、古い友人がやってきた。キクだ。幼稚園からの付き合い。キクはいい人なんだけど、どこかわかってきてくれない。それが辛い。久しぶりにやってきたキクだけど、今日はコロという人を連れてきた。僕たちと友達になりたいらしいんだけど。でもわざわざならなきゃならない友達って何？ 会う前からその後の関係を強いられてるようで息苦しいな。

「はじめましてコロです！ 皆さんが楽しく暮らしてるって聞いて、友達になって欲しくてやってきました」

「はじめまして、ニーナンです」

「ミーミです、よろにゃん」

「ユーヨです、こにちは」

「どうして僕達と友達になりたいの？」

「それはですね、皆さんが魅力的だからです」

「えっ、それはどういうこと？」

「えっ、言葉通りの意味です」

「僕たちが魅力的だから、友達になりたい、と」

「そうです、そのとおり」

「なるほど、でも僕たち、コロさんからみて何が魅力的なのかわからないんだけど、その辺を詳しく教えて欲しいな」

「うーん、うまく言えないけど、魅力的なんです」

「うーん、わからない。ともかく、まだ僕たち、コロさんのこと、よく知らないんだよね、だからとにかく、お話しましょう」

「うんうん、お話、いいですね」

「コロ氏とキクは楽しそうだ。僕とミーミとユーヨはまだ戸惑っている。ミカヅキは隠れて出てこない。コロ氏はなんだかんだと話しだした。

「経済が云々」「政治について」「戦争はどうこう」「哲学について」「宗教は何を信じてる」「鼻眞のスपोर्टチームは」

「なんだかよくわからない。とにかくうんざりしてしまって、いい人かどうかすら見当がつかない。あまりいい感じはしないな。」

「えーと、コロさん、僕たち、コロさんのお話、ちょっとわからない。楽しく過ごしたいよね、僕たちが楽しめるようにして貰えないかな」

「えっ、じゃあ違う話題を」
「黙ってもらえないかな」

「……」
「うん、ありがとう」

やっと心地よい静寂が訪れた。コロ氏は言葉を吐き出したい、その的に僕らを使いたいだけだ。彼が僕らをどう魅力的だと思っているのか知らないが、僕らにどんな価値を感じていようと、無理強いする人とはうまくやっていけない。

「僕たち、が友達になるには、お互いに話をし、お互いに話を聞く必要がある。今のままでは友達になれないと思うよ」

「え、そんな、なんで、ひどい」

「悪気はないのかもしれないけど、一方的に話されるのは、不快で耐えられない」

「私が、不快？ そんな決めつけはやめてください！」

「耐えるのが不可能なレベルなんだ」

「せっかく友達になってあげようとわざわざ来たっていうのに！ 失敬な！ 君たちなんか、いつまでも引きこもって閉じた暮らしをしていればいい！」

「なるほど、それが本音なんだね、上から目線で、なってあげる、か。僕達は友達になってもらわなきゃならない立場じゃない、君に友達になってくれと頼んだわけでもない。なってあげる、なんて不遜な思いを抱いている人が、不遜に思われているのを感じてる人と、仲良く友達になれるわけじゃないか」

「なんだい、頼まれて来てやってるのに、口の利き方も満足に知らない世間知らずめ、こんな引きこもり館、いつでも火をつけてやれるんだからな！ 怯えて暮らせ！」

「脅迫はやめるんだ」

「コロ氏は僕たちの館を出ていった。キクは最初から最後までオロオロして、コロ氏の後を追おうとしている。」

「キク、ちょっと待った」

「あっ、コロさんが行っちゃう、追わないと」

「その前に答えて、君が頼んだのかい？ 僕らの友達になってやってくれ、と」

「あっ、その、そりゃあ、そうだよ、自分たちだけで閉じこもって、家族ごっこなんてしちゃってさ、僕や他の旧友も放ったらかしで、引きこもって、恥ずかしくないの？ 幸福だとかなんだとか、自分たちさえ良ければいいってことだろ、何様のつもりだよ、みんな君たちのこと、早くまともな人間になれて、社会に貢献しろって、言ってるよ」

「僻むなよ、羨ましいなら素直にそう言えばいいんだ、友達ならそうやって打ち解けていけるだろ」

「みんな君たちのこと、はぐれものの、引きこもりって言ってるよ、世界の終わりに立ち向かう勇気の無い、臆病者の集まりだって」

「目を覚ませ、誰が何を言おうと、僕たちは恥じることなんか無い、世界は崩壊した、

それでも僕たちは未来に希望を繋いでる、キクの言う『みんな』が何を言おうと、俺たちは間違ったことなんかしちゃいない、ただ信じるものが違うだけだ、わからないか」「まともな人間の友達を作ってやろうと、私は関大な心で君たちに導きを持ってきた、まともな社会性もない君たちなんかと友達になってあげようと勇気を出してくれたコ口さんは素晴らしい人だ、君たちなんか彼の足元にも及ばないよ、それをあんなひどい言葉で傷つけて、それでも君には人の心があるのか？ 恥ずかしくないのか？ 何のために生まれてきたんだ、何の価値も無いままでいて」

「いい加減にしろ、他人を否定するな、受け入れるんだ、それが友情だろう、キク、僕らは幼い時から知った仲だ、友達だとも思ってきた、だが同時にどこか信じ合えないものを感じていただろう？ それを乗り越えるんだ、解り合おうじゃないか」

「解り合ってあげる価値が君のどこにある？ 恥を知れと言ってるんだ、反社会勢力め、世界に対する裏切り者め、こんなに良くしてやった私の親切心がわからないのか」「今が心から解り合う機会だ、心を開いてくれ、キク」

「閉じているのは君のほうだろう、正々堂々と表社会に出て自分の限界と戦いなさい」「キクの言う社会とは、他人の幸福を尊重できずに脅して怯えさせ争いに駆り出したいだけの、それこそ臆病なだけの連中じゃないか、未来を見るんだ、争いを捨てる、兵士に駆り出したいだけの連中の口車に乗せられるな、せっかく馬鹿げた大人たちの世界が終わったんだ、子供たちだけの世界を、現実に実現してるこの理想郷を、守るんだ」

「臆病者はお前だ！ お前なんかの分際で私に言葉の剣を向けるな、本当に恥ずかしい奴だ」

「キク！ 心を信じる！ 僕を信じる！ 本当の友達になるう！」

「ええい、友達が欲しかったのなら、コ口さんに言えば良かったじゃないか！」

「ポツと出の不快な人物は後だ、君はキクだろう？ 幼い頃の思い出を忘れたのか」

「常に君という落伍者を庇ってやってたよ」

「身に覚えがない！ 有りもしない恩を着せるな」

「君が残した牛乳、私が飲んでやってた、君がサボった掃除、私がやらされた、君がやらなかった宿題、私がやってあげていた」

「一つも頼んだことがない！ キクはそんなことしなくて良かったんだよ、初めから」「してあげなくちゃ君が困っていただろう！ 社会からの評価が、下がるから、大人からの評価が下がるから」

「くだらない、どうでもいいんだそんなものは、初めから何の価値も無いものだ、キクは何の価値も無いものに縛られてるだけなんだよ、思い込みに囚われてるだけの哀れな自分という名の牢獄の囚人だ、目を覚ませ」

「うるさい、うるさいうるさい、私の思いなんか知らないくせに、私がどれだけ君を好きだったか、何もわかってないくせに、私の事なんか眼中になくて、他の拾っただけの子供たちなんかを愛しやがって、私がどれだけニーナンのために尽くしてきたか、一つも評価してくれないで、酷いよ！ 人でなし！ もう君のことなんか知るもんか！」

「待て、急にそんな、待ってて」

「ボタン、と扉を閉め、キクは出ていった。」

「怯えた顔のミーミとユーヨが僕を見る。」

「ごめんね、ミーミのせいだね、ミーミがいなければ」

「違うよミーミ、言い争って怖かったね、ごめん」

「ニーナン、ユーヨが居たら、いけなかった？ 僕がいなければ良かったんだよね」

「違うよユーヨ、僕にとって、二人が誰より大切な人だよ」

「ニーナン！」

「ニーナン！」

僕は二人を抱きしめた。三人で泣きながら涙を舐めあつた。

「しよっぱ」

「海が出来た」

「泳ごうよ」

僕たちは三人で広いお風呂に行つて、プールみたいに泳いで遊んだ。どこかに隠れていたミカツキはお風呂の手前まで来て僕たちを眺めてる。僕たちは目一杯泳いで水をかけあつて、疲れに疲れてみんなでベッドに横になった。

「ニーナン、好きだよ」

「ニーナン、愛してる」

「ミーミ、ユーヨ、ミカ、みんな一緒だよ」

僕は二人と一匹を抱きしめながら、今日の出来事に思いを巡らせた。キクは僕のが好きだったんだな。それでもキクは、僕のことを何もわかっていなかった。心を開いてくれさえすれば、わかり会えたはずなのに。コロという人は、僕らと噛み合うところが、全然なかったな。それでもよくよく話してみれば、きつといつかわかり会えるのだと思いたい。ただ、それには、彼女の一方的な話を、やめてもらわなくちゃならないな。僕たちの話にも耳を傾けてくれるよう、もっと根気強く話しかけるべきだった。僕はうんざりしてしまっていたから。もっと交渉が上手い人なら、きつとあんな人とも友達になれたはずなんだ。誰とだつていつか理解し合える日が訪れて、誰だつて僕たちの楽園の一員になれるはずなんだ。みんなと友達になって、みんなと仲良く暮らせる日が、いつかきつとくるはずだ。僕を好きだと言ってくれる人達みんなと友達でいられる日が、いつか、必ず。

そう思った時、僕は涙を流して泣いていた。声を上げて泣いていた。ミーミとユーヨとミカツキが、また僕の涙を掬い舐めてくれる。僕の望みはいつか叶うのだろうか。僕はここにいる二人と一匹がいるだけで、もう幸福で、それだけで十分だつて、思ってるのに、それでも他の人達とも、友達になりたかつたなつて、どうしたつて思つてしまうんだ。そう思えば思うほど、涙が溢れてくるのだった。

第二話 しんらいのありがた

キクとの一件は、僕の心に傷を負わせた。僕たちの間に友情があつたのか、今となつては判らない。何にせよ、彼女との友情は、もうどこかに行つてしまつたんだろう。そう思い、やっと吹っ切れそうになつた時、彼女は再びやってきた。

「ニーナン！」

元気にはちきれんばかりの笑顔でやってきたキクを見て、僕はこの間の出来事は全て幻だったのではないかと、一瞬思つてしまった。しかしそんなことは無い、あれは、確かに、現実の出来事だった。

「ニーナン、今日は君にとつて望ましいことこの上ない来客が居るんだ。さあ、紹介するよ、ニコさん！」

僕たちが啞然としているのに気づきもせず、キクはニコと呼ばれた人物を招きいれた。

「ちよつと待つて、こないだのことを忘れたの？ 君は友達じゃない、帰りなさい」

「まあまあ、ニコさんだよ」

キクは晴れやかな顔をしている。いいしれない不安を感じる。

「はじめましてニコです。今日は君たちがいい知らせがあるんだ」

「帰りなさい、家宅不法侵入だ、警察を呼ぶぞ」

「私はその警察です」

「なんだって!？」

ニコは僕を一瞥して話を続ける。

「子供警察のニコですよ。単刀直入に伝えます。ミーミ、君のいとこがいる、年上で、保護者に相応しい。君をその人のところに帰宅させます」

「えっ、そんな、嫌だよ」

ミーミは身を固くして僕にしがみつく。

「急になんだ、僕たちは共同生活をして、平和に暮らしてる、何の問題も無いことだ」

「それからユーヨ、君の仕えていた主人の息子が発見された、君の正当な主人として君を帰宅させる」

「嘘、嫌よ」

ユーヨも僕とミーミを抱きしめる。僕もしっかり二人を抱きしめる。

「僕たちは誰からも邪魔されるいわれはない、警察がどうして人権を蹂躪できるんだ、僕たちには僕たちの暮らしがある、邪魔しないでくれ」

「そうはいかない。あなたのことはキクから報告を受けている。他の子供達を自分の都合のいいように操り、キクたち社会への窓口となる人間を排斥する反社会勢力の筆頭だとね」

「そんな、でたらめだ、人権を損なっているのはキクたちなんだぞ」

キクが笑顔で言う。

「ふふ、ニーナン、私は社会から信頼されているんだよ。君と違って社会のために活動しているからね。君のような非人間的なひどい人格で、私という誠実で親切で人権を尊ぶ人間を傷つける悪党は、正当な理由で迫害されるのだよ。君が搾取してきた子達を正当な保護者に返したまえ」

「私怨じゃないか！ 何が搾取だ、僕たちは手を取り合って求め合い、力を併せて生きてきたんだ、その絆を引き裂こうとするなんて、ひどすぎる！」

「何を言ってもだめだ、ニーナン。このニコは子供警察として、子供政府からも委任され、君からその子たちを取り返しに来た。もう観念するんだ」

ミーミとユーヨは口々に叫ぶ。

「ミーミはニーナンと一緒にいる！」

「ユーヨもニーナンと暮らすの！」

「やれやれ、自分たちが搾取されていることに気づいてないほど子供なんだな、君たちは保護する。安心しなさい」

ミーミとユーヨは身を固くして僕にしがみつく力を強くする。

「二人が怖がってるじゃないか、やめてくれ、頼む、帰ってくれ、僕たちの生活を邪魔しないでくれ」

「二人を放せ、抵抗すると容赦しないぞ」

「僕は二人を絶対手放さない」

「ようしわかった」

ニコは僕の頭を警棒で打ちのめす。叩いて頭蓋骨を砕き、両腕の骨をねじってへし折り、両足を銃で撃ち抜く、僕の顔を蹴り上げ、内蔵を踏み潰し、剥き出しになった神経を直に触って僕を叫ばせる。必死で僕の名を呼ぶミーミとユーヨの声が聞こえる。ミカヅキが飛びかかる音と、潰される音、ミーミとユーヨの泣き声が聞こえる。キクの笑い声、ニコの勝鬨、ミーミとユーヨの引きずられる音、その音ももう遠ざかり、聞こえなくなってしまう。僕はもうすぐ死ぬのだろう。二人を助けたかった、ミカヅキを助けたかった、僕の望んだ理想郷、僕の楽園は、確かにここにあったのに、他者の善意か

ら、踏みにじられてしまった。子供たちは、子供たちのままで楽園を享受することが、できなかったのかな。大人のような社会に染まって、楽園を滅ぼして、そうして僕を死なせて。ミーミ、ユーヨ、どうなってしまっただろう、心配で、心配で、ただ心配で、そういうえば誰かが言っていた、僕が死ぬ時に世界が終わるって、誰だったろう、僕の心臓に世界破滅兵器の引き金を仕掛けたのは、誰だったっけ、薄れゆく意識、ああ、神様、そんなものはないとしても、僕らの世界を助けてくれるそんな誰かが、居てくれたら良かったのに。僕が生きてることが、社会のためになることそのものだって、誰かが理解してくれていたら、本当に良かったのにな。僕の、命の灯が消える時、世界は

終章 らくえん

賑やかな人波、陽気な律動、祭囃子だ。屋台が並んで、見世物小屋もある、櫓が組まれて、周りは踊り明かしてる。僕は踊るし、ミーミも、ユーヨも、踊ってる。ミカヅキなんか、櫓の上で踊ってる。それにほら、キクも、コロ氏も、ニコも、かつての友たちも、今はもう居ないはずの大人たちも、僕らの前や後ろで、踊ってる。あそこに見える小さい子供たちは、これからユーヨが産んでくれる、僕やミーミの子供たちだ。みんなみんな陽気に踊ってる。物語に登場するはずだった、けれど登場できなかった人達だって、みんな、みんな、踊ってる。陽気な律動、太鼓が響く。笛も響いて、体が動く。どんつくどんつく、ぴーひやらら、どんどんつくつ、ぴーひやらぴー。踊って、踊って、櫓の周りを、歩いて、歩いて、みんな回って、回って回って、地球の全部を動かす力、原動力を、蓄えてるみたいだ。世界の力が集結して、世界に力を送ってる。幸福な、楽園だ。みんなみんな、幸福だ。最高の躍動、恍惚の感動、体中から汗が溢れ、魂が躍動する。どんつくどんつく、ぴーひやらら、どんどんつくつ、ぴーひやらぴー。

布姉 新南「ぬのあね にいなん」、通称ニナン、享年14。

姪麻 魅忌「めいま みいみ」、通称ミーミ、享年13。

夜歩 遊夜「やあゆ ゆうよ」、通称ユーヨ、享年14。

三日月「みかづき」、通称ミカヅキ、享年3。

悪 魔子「あく まこ」、通称悪魔、享年10万12。

過去形 菊「かこけ きく」、通称キク、享年14。

心 転子老「こころ こるころう」、通称コロ、享年14。

煮凝 二虎五狼「にこごり にこごろう」、通称ニコ、享年14。

朧恋 鈴蘭「ろうれん りんらん」、通称リンラン、享年15。

憂哭 嫋「うれいな たお」、通称タオ、享年14。

楠 苦酢子「くす くすこ」、通称クスクス、享年14。

潜 砒素香「ひそ ひそか」、通称ヒソヒソ、享年14。

……
……
……
……

世界を最後まで生き抜いた僕たちの、魂の祭りが、今日、終わった。

幸福は、あったよ。楽園は、あったよ。

僕たちの魂は、流転して、地球と一体になって、宇宙と一体になって、また新たな世界へと、生まれ還されて行く。
ありがとう、みんな。
君がいつか魂になったとき、僕たちと一緒に、混ざり合おう。
その時、またね。

楽園二ーナン 完